

日本語日常会話における分裂文

眞田 雅子・伊藤麻友子・菊竹 恭子

1. はじめに

分裂文とは次のような構文を指す。

- (1) 彼らが勉強したがっていたのは言語学だった。(井上 1978. p. 21)

英語の Cleft sentences に相当する日本語の表現である。英語には Cleft sentences の他に Pseudo-cleft sentences と呼ばれるものがあるが、日本語では上記の構文のみが、いわゆる前提を表す主題の名詞節に対して焦点を表す述部が続く文となる。このような構文が日本語日常会話においてどのように使われているかを調べてみると、その使用頻度が著しく低いことが明らかになった。通常の会話でこのような機能を持つ表現がほとんど不要であるというような結論は日本語母語話者として出し難く、では実際どんな表現をするのかを考えてみると、

- (2) 言語学だよ、彼らが勉強したがってたのは。

となる。そこで本稿では、このようないわゆる倒置文（あるいは、後置文・逆転文と呼ばれるもの）をも分裂文と呼び、生録音文字化資料〔註〕をデータに用いて、その構造と機能を明らかにすることを目指した。

2. 分裂文と倒置文

本稿では、1 節で述べたように、例文 (1) のような文と、(2) のような文を含むさまざまないわゆる倒置文を、分裂文と読んで、考察の対象とする。日本語研究の中では、分裂文というものは、ほとんどこれまで取り上げられて

きていない。(1)のような文は、変形規則という視点を導入しない限り、取り立てて論ずべき形式を持っているとはみなされなかったためと考えられるが、先にも指摘したとおり、いわゆる前提を表す名詞節が主題となり、その述部として焦点を表す繫辞表現が来るという構文は、統語論的にも、語用論的にも興味深いものである。

一方、(2)のような倒置文、あるいは後置文・逆転文と呼ばれる構文は、宮地(1984)、高見(1995a, b 1997)、藤井(1991, 1995)などで取り上げられており、変形規則という視点からは、Right Dislocation の問題として、久野(1978)の右方転移文、井上(1978)の右方転位、高見(1995)の右方移動構文という術語のもとに論じられている。

本稿では、これ等すべてを、分裂文という名称のもとにまとめて扱うのだが、その理由は、例文(1)と(2)に共通する機能に注目したことと、(2)のようなものを、一文と認めると同時に、それが倒置、後置、逆転、右方転移、右方転位、右方移動といった操作による結果とは考えないことを明確にするためである。あくまで分裂した形を持つ一文として捉えているという主張である。ただし、いわゆる倒置文と(1)、(2)を区別する際には、(1)を真性分裂文、(2)を疑似分裂文とよぶ。

用例を採取するに当たっては、述語の後に来ている要素が、述部より前のどこかに置いた場合に、一文となるかどうかを基準とした。従属節として述語の前に来られるものも分析対象とした。

3. 資料分析法と分析結果

3.1 生録音文字化資料の概要

生録音文字化資料 90 件分の資料の中から、2 節にあるような述語要素が先に現れ、その他の要素が後続しているものを、取り出し分析を試みた。90 件分の資料から、発話数 15,993、該当する例文数 930 を抽出することができた。例文数の発話数における割合は、約 6% (0.058) であった。90 件中の含有率の最高値は 0.201 であり、最低値は 0.007 であった。上記の例文を含

まない文字化資料は1件もなかった。

3.2 後続要素の分布表と倒置要素の分類別用例

次に後続の要素を分析したところ下記のようになった。(表1 参照)

[表1 後続要素の分布]

	後 続 要 素	発生回数	頻度 (%)
I	副詞 (句・節も含む) (内訳) (%)	486	52.3
	A 様態・程度を表す副詞 97 (10.4)		
	B Modality を表すもの 88 (9.4)		
	C 時を表す副詞 68 (7.3)		
	D 場所を表す副詞 66 (7.1)		
	E 手段・動作主を表すもの 11 (1.2)		
	F 同伴者を表すもの 10 (1.1)		
	G 比較の表現 7 (0.8)		
	H *等位接続節, 又等位に近い従属節 60 (6.5)		
	I *理由を表す副詞 53 (5.7)		
	J *条件・仮定を表す副詞 26 (2.8)		
	{ うち ABCDEFG の合計が 347 } (37.3)		
	{ *HIJ の合計が 139 } (15.0)		
	(*は節になっているものを表す。)		
II	主語・主題・呼び掛け	270	29.0
III	目的語	78	8.4
IV	連体修飾	27	2.9
V	接続詞	24	2.6
VI	真性分裂文	8	0.9
VII	その他	37	3.9
	総 合 計	930	100.0

また、後続要素を実際の発話資料の中から抽出し下記に記載した。

後続要素の分類別用例

I 副詞（句・節も含む）

A 様態・程度を表す副詞

- (3) わたしわかんないや、全然。
- (4) うまいんだって、けっこう。
- (5) けっこう多いんだね、一番ね、接触が。
- (6) しっかり寝とるやんか、いっつも、ガーガー、おまえ。
- (7) いや、そんなことなかった、だいたい。

B Modality を表すもの

- (8) 何か、指揮とったんだよね、確かね。
- (9) あの、二人だけで行った時ー？ もしかして…。
- (10) まっ、セミリングルぐらいかな、やっぱり。
- (11) でも、ここが一番大きいんや、たぶん。
- (12) 時間ないんだよね、ほんと。

C 時を表す副詞

- (13) 保険証も持って行ってへんかってん、今日。
- (14) ついてないよ、今。
- (15) だけど何か自慢してたしょ、こないだ。
- (16) 聞いてみ、今度。
- (17) 私は見なかった、そんな時。

D 場所を表す副詞

- (18) 今日、覚えて来てん、病院で。
- (19) 卓哉のまわり行っている人いない、佐倉まで。
- (20) 飛び降りようかと思っちゃった、その新幹線から。
- (21) あっ、ねーねー行く？ 就職説明会。
- (22) 倒れちゃうの、教室で。
- (23) ぶどう？ あんの？ どこに？

E 手段・動作主を表すもの

(24) 少し働きなさいよ！ 家庭教師とか。

(25) ほんとに痩せるの？ これ。

F 同伴者を表すもの

(26) 行ってきな。姉ちゃんと二人で。

(27) また行きましょう、みんなで。

G 比較の表現

(28) それで覚えているんだよ、ほかの人よりも。

(29) 温泉、例のごとく。

H 等位接続節、又等位に近い従属節

(30) すっごい痛々しかったんだよ！ 目もはれてたし。

(31) ドライヤーね、使えたの、何か知らないけど。

(32) あたし、持っていないの、実家にあるんだけど。

I 理由を表す副詞

(33) 姉ちゃんだめだ、方向音痴だから。

(34) いいんだよ、有志だもん。

(35) そんなんばかり食べちゃだめ、偏っちゃうから。

(36) ちょっと試しにやってみ、撮れないから。

(37) おたくじゃないねん、背水の陣や、お母さん、あんたら若いもん
とちゃうんやから。

J 条件・仮定を表す副詞

(38) 分かるやん、いっぺん経験したら。

(39) ちょっとやじゃない？ 雨が降ったら。

(40) だめっ。ちゃんとバランスのとれた食事をしなくちゃ。

(41) まだいいの？ もどんなくて。

(42) 出歩かないからさ。帰っても全然。

II 主語・主題・呼び掛け

(43) すごいよ、風が。

- (44) いくらなの？ 定価。
(45) なんだったんだろーねえ、あれは。
(46) おいしー、このぶどう。
(47) ちょっと待って、かよこちゃん。

Ⅲ 目的語

- (48) 留守電とかでさ、録音するじゃん？ 自分の声。
(49) みほ食べる？ ごはん。
(50) A ちゃん読み終わった？ あれ。
(51) 1 個もってる、黒の。
(52) まだ見てない、カオの水着。

Ⅳ 連体修飾

- (53) 勢いがちがうよねー、おぼえるー。
(54) 観客すごいよ、このビデオ。

Ⅴ 接続詞

- (55) 海藻だよ、だって。
(56) 今度いこうよ、じゃあ。

Ⅵ a 真性分裂文…8

- (57) 今戻ってきたのは誰？
(58) おばあちゃん運転してんのすごいカッコいい。
(59) ちょっと、こわ、怖いのはそこや。

b 疑似分裂文…9 (Ⅱ主語・主題・呼び掛けの項目に分類してある。)

- (60) いや、ファミリーマートなんですよ、その近くにあるの。
(61) 東京の女子高生だけじゃない？ ポケベルなんかもつの。
(62) 4 時や、4 時までかな、あれ、お金だすの。

Ⅶ その他…その他には下記のものが含まれる。

a 間投詞

(63) あー、今はいいよ、今はいいけど、うん。

(64) 筋肉ないよ、ほら。

(65) 印、ついてないけどさー、ほら。

(66) 堪能できんのや、ほらな。

b 繰り返し…同じ言葉、または先に言ったことの具体例を繰り返し発話すること。

(67) その後どうするの、その後。

(68) いや、後が長いわ、後が。

(69) え、でもけっこう目が大きいよね、黒目が。

(70) これ捨てていいよ、この紙。

(71) じゃけ、あれがあるじゃん、ダニ取りのシャンプーが。

3.3 後続要素の分析結果

3.2 の「表 1 後続要素の分布」と「後続要素の分類別用例」から次のようなことが分かった。

(ア) 副詞が 52.3% で、後続要素の半分以上を占めている。但し、副詞と一括りにしてあるが、様々なことを表しており、本稿では意味的に A～J の 10 項目に分類してある。(表 1 の*は節になっているものを表す。)

(イ) 副詞を見てみると、上記分類のうちでは、「A 様態・程度を表す副詞」がもっとも多く全体の 10.4% を占めている。

例：全然・けっこう・だいたい・すごく 等々。

また、「B Modality を表すもの」が 88 件で 9.5% を占めている。

例：確かね・もしかして・やっぱり・たぶん・ほんと 等々。

(ウ) 「C 時を表す副詞」が 68 件 7.3%, 「D 場所を表す副詞」が 66 件 7.1% であり、かなり高い頻度で後続要素となりうることを示している。ただ

し、「C 時を表す副詞」「D 場所を表す副詞」として発話されるもの全体の何%が後続要素となっているかの検証を行ってみる必要があると考え、それを今後の研究課題の一つとしたい。

- (エ) 副詞のうち*の付いている項目 HIJ は節になっているものを表している。HIJ の 3 項目を合わせると 139 件 (14.9%) となる。この内容は、上記例文からもわかるように、まず「言いたいこと」を最初に口に出し、その理由・条件・仮定・説明、などを、詳しく話す、という流れになっている。

- (オ) 副詞の次に多いのは「主語・主題・呼び掛け」で、29.0% を占めている。

例：お母さん・あの人・この人・匂いが・風が・あれは 等々。

ここでも、前項は「言いたいこと」を最初に口に出し、「言いたいこと」の主語・あるいは主題を後続要素で続け、明確にすることにより文を整え、完成に導いている。

例文：(43) すごいよ、風が。

ここでは、「すごい」という感動が「言いたいこと」であり、「風が」と続けることにより、感動を呼び覚ました媒体を明確にし、文を整え、文を完成させている。

例文：(44) いくらなの？ 定価は。

という疑問文では、「いくら」なのか、ということが話者が知りたいことであり、「定価は」と続けることにより、知りたいことの内容を明確にし、文を整え、完成させている。

例文：(61) 東京の女子高生だけじゃない？ ポケベルなんかもつの。

これは上記 3.2⑥b の疑似分裂文の例文であるが、疑似分裂文も「主語・主題・呼び掛け」に含まれている。ここでも「東京の女子高生だけだ」ということが、話者の言いたいことであり、何が「東京の女子高生だけ」かということの後続の「ポケベルなんかもつの」という言葉で明確にしている。

- (カ) 目的語は後続要素として三番目に頻度が高いものとして現れてきている。後続要素として目的語を持つ文を分類してみると次のようになった。

疑問文…15, 依頼文…8, 強い願望を表明する文…2, 残りの文も前項が言い切りの形で終わるもの…23, 自分の判断を強調する機能を持つと言われる終助詞の「よ」がつくもの…11, 「じゃん」がつくもの…8, となっており、78件中67件(85.9%)は前項で自分の意志、つまり自分の「言いたいこと」や「聞きたいこと」を主張していると言える。

- (キ) 連体修飾・形容詞・形容動詞を後続要素としてもつ発話も、「言いたいこと」は、

例文: (53) 勢いがちがうよねー、おぼえるー。

例文: (54) 観客すごいよ、このビデオ。

前項の「勢いがちがう」「観客すごい」ということであり、言った後で、何の勢いなのか、何がすごいのか、を続けて述べ、文を整え完成させていっている。

- (ク) 今回の調査で頻度が比較的少なかったものも、上記分析結果と同じように、前項に「言いたいこと」「聞きたいこと」が述べられ後続の発話に繋がっていっている。頻度が比較的少なかったものの中には、後項に必ずしも必要ではない要素がきている場合もある。例えば

E 手段・動作主を表すもの

(24) 少し働きなさいよ！ 家庭教師とか。

G 比較の表現

(29) 温泉、例のごとく。

などがある。「言いたいこと」は「働きなさいよ!」であり、「家庭教師とか」は一つの例示である。(29) も同じである。

また、V接続詞の例文

(55) 海藻だよ、だって。

(56) 今度いこうよ、じゃあ。

も「言いたいこと」は「海藻だよ」「今度いこうよ」であり、後続要素は必ずしも必要ではない。しかし、後続要素があることにより、発話者が単独にではなく、他者との関わりの中で、その関係を継続していく方向での発話がなされていることが明白である。

それは、この調査の中で、後続要素が名詞などの体言、または体言止めにされた句、節が多いことにも現れている。前項要素に述部が来る発話において、今までに度々指摘してきたように、前項要素に発話者の「言いたいこと」「聞きたいこと」という強い主張があるのにも関わらず、不快感も伴わずに、会話がスムーズに進行し、なおかつ会話が弾んで運んでいるということは、後続要素が、一つには必要な要素を発話することにより、文が整い完成していく役割をはたしているということであり、もう一つには、人間関係を損なわない方向で、文を整え、やはり完成に導くという役割をもはたしているといえるのではないだろうか。

4. 日本語分裂文の特性

初めに指摘した通り、真性分裂文は用例全体のたった 0.9% を占めるだけである。日常会話において、いかに使用されない構文かが明らかである。他の分裂文中の、後続要素となっているものについては、930 の用例中、副詞的なものが一番多かったことは、藤井(1995)の分析と同じである。従属節も含めているため、藤井論文よりもさらにその割合は高くなっていると考えられる。後続要素が殆どどんな文法的要素をも含んでいる点も、藤井論文の結果と共通している。

先に 2 節で指摘したとおり、本稿においては、「後置文」「右方転移文」などの名称を避け、ここで扱う構文を、あえて分裂文と呼んできたわけだが、それは、Fukui(1993)にもあるとおり、この種の構文を、移動変形と考えることは、移動変形という規則の持つ一般性に反するという理由もある。日本語の主要部末尾のパラメーターに違反することになる「後置」という移動は、

コストが高く、また、高いコストを正当化する理由づけが存在しないということである。

この種の構文を、移動変形と見なすことを困難にする次のような例文もある。

(72) a. ね、ね、ね、ねえ、私 結局 かばんがなかったの、
 スーツケースじゃなくて、普通の。

b. ね、ね、ね、ねえ、私 結局 スーツケースじゃなくて
 普通のかばんがなかったの。

(72a) は、もし移動変形の結果と考えるなら、(72b) の「スーツケースじゃなくて普通のかばん」という名詞句の、連体修飾語の部分が移動していることになるわけだが、そもそも構成素という考え方にたって見るなら、「スーツケースじゃないかばん」と「普通のかばん」を等位接続によって繋げたものが、「スーツケースじゃなくて普通のかばん」となるわけで、「スーツケースじゃなくて普通の」というものは、それ自体が構成素をなしていないと考えられる。句構造規則で、単一の節点 (node) に支配されていない連鎖の移動というものは通常あり得ないことである。

以上の理由から、本稿で扱ってきた分裂文を、“移動”という操作の結果と考えることに無理があることは明らかであろう。ここで注目したいのは、井上(1978)による「右方転位文」のまとめである。これによれば、右方転位文は以下のような五つの特色を持つ。(pp. 98-9)

① 右方に転位される名詞句は格助詞を伴うことが多い。

主題化された名詞句も転位される。

② 「(あいつは) どこかへ行ってしまったよ、うちのどら猫は。」

に見られるとおり、代用名詞はあってもなくてもよい。

③ 名詞句に限らず、副詞・形容詞・その他の修飾語も転位できる。

④ 右方転位は繰り返し適用することができる。

⑤右方転位も左方転位も一般的には、特定名詞句に適用される。

しかし代用名詞が残らなければ、不特定名詞句でも転位できる。
これらの特色は、ほとんど3節で観察されたことがらである。

②は、例文(70)の代用名詞「これ」がない場合の

(70') 捨てていいよ、この紙。

を考えれば納得する。④についても、以下に繰り返す(6)の例文であきらかである。

(6) しっかり寝とるやんか、いっつも、ガーガー、おまえ。

⑤の不特定名詞の例は、例文(49)の「ごはん」に見られるとおりである。

これら①～⑤の特色は、いずれも左方転位文と主題文にはみられないものであることから、井上は以下のような結論を導き出している。

- a. 右方転位を受けた要素を後置された主題と考えることはできない。
- b. 日本文で述語の後に現れうる要素は終助詞くらいのものであるので右方に転位される句を深層構造に生成しておくことはできない。
- c. 右方転位を仮定することは、述語の後への移動の唯一のケースになり、望ましくない。
- d. 従って、これを文の部分的な繰り返しと考える。

この最後の結論を支持するような用例が、実に既に挙げた例文(67)～(71)である。そしてさらに次の二文を比較してみると、決して同じ状況で使われる表現ではないことがわかる。

(73) a. うん、間に合う、間に合う、余裕で。

b. うん、余裕で間に合う、間に合う。

- (74) a. あるある、5時から。
b. 5時からあるある。
- (75) a. 誰ですか、あなたは？！
b. あなたは誰ですか？！

いずれも a. の文では、話し手が述語の部分をまず言いたいのである。前項の述語の部分が「言いたいこと」なのである。(73)(74)の繰り返しの表現は、そういう話者の意気込みが表現されているのであって b. の文からは、その話者の意気込みが伝わって来なくなっている。肝心なことは、話者が、まず、「言いたいこと」を口にする、ということである。そして、さらに、「次に言いたいこと」「付け加えたいこと」を口にするということである。そして、更に、付け加えたいことを言い足して行って、文が完成されていくというプロセスは、3節で観察された通りである。従って、本稿で取り上げた分裂文というものは、話者が伝えたいことを、最も重要なものから始めて、順次、文を完成させていくものと考えることができる。

高見(1995a)は、次のような「日本語の後置文に対する機能論的制約」(p. 228)を提案し、久野(1978)の、後続要素が復元可能と判断して省略したものを確認のために繰り返したのか、補足的インフォメーションを表すものに限られるという考えを退けている。

日本語の後置文に対する機能論的制約：日本語の後置文において主動詞の後ろに現れる要素は、その文中で最も重要度の高い情報を表す要素以外のものに限られる。

高見論文の問題は「最も重要度の高い情報を表す要素」というものを、話者の視点からではなく、統語的に規定しようとしたところにある。話者を中心に「最も重要度の高い情報」というものを捉えるならば、この制約には何の問題もなく、我々の主張を、別の表現で述べたものと捉えることができる

が、高見によれば、疑問詞というものは、常に最重要度の情報を表す要素であるので、決して主動詞の後ろに現れることがない、ということになるが、3節(23)のようなものが、現実に使われているのである。

長いこと、言語研究は、現実の話しことばを離れて、構造を中心に議論することに慣れてきたために、文という概念がすっかり整ったものとして考えられ、その中に当然存在するとされる要素が、移動したり、省略されたりしているという分析が盛んであった。しかし、現実の会話を観察してみると、我々は、「言いたいこと」を口に出すことから始めて、文を整え完成していくものだということに気付かされる。分裂文とは、まさにそのような文の形なのである。

5. 分裂文の現れ易い会話の特徴

この節では分裂文の現れ易い会話にはどのような特徴があるのかを分析、考察する。そのため、90件の会話について、出現した分裂文が全体の発話数に対して占める割合の高い会話8件と、最も少なかった会話1件を取り上げる。分裂文の多かった上位8件の会話は、どれも分裂文の総発話数に対する割合が、1割を越えており、最も多いものに関しては、20.1%であった。一方、最も分裂文出現回数の少なかったものは、その割合が0.7%と平均の5.8%と比較しても極めて低かった。但し、本稿で分析した生録音文字化資料90件の会話は全て、学生の身近な日常会話であり、参加者の関係も皆、親しい間柄の者・親、兄弟、親戚、友人等である。そういった意味では、ここで取り扱った会話は既に、大方近似した特徴をもつものである。そのことを踏まえた上で、分裂文の出現回数という視点から、90件の中から先に述べた9件の会話を取り上げ、論じていく。

5.1 分裂文の多い会話と少ない会話の対比

まず、分裂文の多かった8件と最も少なかった1件の計9件の会話において、それぞれの会話の参加者について、話し手になっている割合を調べる。

[表2 話し手としての発話数とその割合]

会話		参加者	話し手としての発話数	割合 (%)
分裂文の少ない会話	A の家に友人 B を招いた夜の会話	A (学生)	51	52.0
		B (A の友人)	15	15.3
		C (A の母)	25	25.6
		D (A の兄)	7	7.1
		総計	98	100.0
分裂文の多い会話	飲食店での学生 2 人の会話	A (学生)	62	50.4
		B (A の友人)	61	49.6
		総計	123	100.0
	学生 3 人の会話	A	31	26.3
		B	42	35.6
		C	45	38.1
		総計	118	100.0
	A の家で学生 3 人の会話	A	55	32.0
		B	53	30.8
		C	45	37.2
		総計	172	100.0
	A の家で学生 4 人の会話	A	63	23.7
		B	66	24.8
		C	88	33.1
		D	49	18.4
		総計	266	100.0
	姉妹 (兄弟) の会話	A (学生)	45	48.4
		B (A の妹)	48	51.6
		総計	93	100.0
	親類 4 人の会話	A (D の祖母)	28	27.5
		B (D の叔母)	37	36.2
		C (D の母)	28	27.5
		D (学生)	9	8.8
		総計	102	100.0
	母と子の会話	A (B の母)	45	57.7
		B (学生)	33	42.3
		総計	78	100.0
	食事準備時の母子の会話	A (B の母)	51	52.0
		B (学生)	47	48.0
		総計	98	100.0

その方法として、あいづち（うん、んー、ああ等）などの聞き手としての発話を除いた発話の総数を「話し手としての発話」と考え、一人一人の参加者について、その数を比較すると前頁のようになった。（p. 99 表 2）

表 2 は、分裂文の出現数の最も少なかった会話と多かった他の 8 件の会話についてのものであり、分裂文の少なかった会話は、他のものと明らかな相違点が見られる。分裂文の少なかった会話では、4 人の参加者の「話し手としての発話数」を見てみると、A が 51 発話、全体の 52% で過半数を占め、B は 15 発話で 15.3%, C は 25 発話で 25.6%, D は 7 発話で 7.1% となっている。このことから、4 人のうち、A の「話し手としての発話数」が他の 3 人に比べ圧倒的に多いことがわかる。これに対し、分裂文が多く現れていた 8 件の会話について見てみると、大半の会話ではどの参加者についても、ほぼ同等に「話し手としての発話数」を数えることができる。すなわち、分裂文の現れにくい会話の特徴として、会話の参加者のうち、一人が終始話しの中心となり、その他の参加者はほとんど聞き手として会話に参加していることがわかる。逆に、分裂文の現れ易い会話の特徴として、会話の参加者全員が対等に話し手になっていることがいえるであろう。

5.2. 会話例の考察

上記のような違いのある会話は、実際どのようなものなのか、次に例をあげて考えてみたい。

(76) 《A の家に B を招いた夜の会話》

1A: ってゆってー、{笑い} ごめーんおじいちゃんとかいって、あーおこられちゃったーとか思って、{笑い} すごいなんか軽くあしらわれたって感じでちょっとね、

2B: なんかさ // ー、

3A: だったのね。

4B: 言い方が // なんかさー、{笑い}

5A: そうそうそう、おじいちゃんそういう興味ないとさ
ね。

6ABCD: {笑い}

7A: なんかねー、(1.1 秒) んー、お兄ちゃんってすごいなあって。か
ずたかおじちゃんとかねー、感心してたよ。(1.1 秒) おじいちゃ
んとか、

8D: (1.1 秒) 朝はやいのはまいったけどね。

9A: (1.3 秒) あ、もう 6 時だぞとか言われたんでしょ。

10ABCD: {笑い}

(76) の会話は、A の家に友人 B が泊まりに来たとき、夕食後に食卓でおこ
なわれたものである。第一に、この部分では、B を自宅に招いた A が、家族
である母 C と兄 D と、友人である B の間で、話の中心となって、友人 B, 母
C, 兄 D に語りかけながら、会話を進めている様子がうかがえる。それに対
して、B, C, D は A の発話の途中で、2B のようにことばにならない気持ちを
伝える言語表現「なんかさー」を挟んだり、非言語的表現である笑いでかえ
したり、また、7A によって話し手としての発話を促されている。第二に、
7A, 8B, 9A の括弧の中の数字で示される次の発話がなされるまでのポーズ
からわかることとして、発話と発話の間が長くとられていることも特徴的で
ある。

(77) 《飲食店での学生 2 人の会話》

1A: あー、司法試験目指してる人？

2B: あー、4000 人とか思っちゃって。4000 人でさ 100 何人しか通ら
ないんだよ。

3A: うーん、あー、狭き門だねー。

4B: 狭き門だわって感じじゃない？

5A: おじゃ、受ける？ 司法試験？

- 6B: いやー司法書士は受けようかなって思ってるけど？
- 7B: ふーん。司法書士ってどういうの？ 裁判所で働く人？
- 8A: ううん。なんか、うん、ちゃんと開業できるよ。弁護士みたいに。
- 9A: 弁護士とは違うの？
- 10B: 弁護士は司法試験。司法書士さんっていうのはあの、いろいろ書類作成したりする人。うん、役所に提出する書類とか、土地登記に関する書類とか、そういうのを作る人。代表して。

(77) の会話は、飲食店で学生 A と B が進路についての情報交換をしているときのものである。分裂文出現数の少なかった (76) の会話と大きく異なる点は、会話参加者が質問、答え、意見表出などを通して、会話の中で同等な話し手となっており、どちらかが一方的に話者となって会話を進めたりするのではなく、お互いに会話を進めている点である。更に 4B の質問に対し、5A では同意などをあいづち的表現で示すのではなく、2B の意見表明を受けて、すぐに質問をし返している。ここでは、分裂文がみられることと同時に、発話と発話の間が短いこと、すなわち、4B の後、間断なく A が心に浮かんだことをそのまま、ことばとして表出していることがわかる。また、もう一つの例として、7A-8B-9A-10B と質問とその答えというやり取りが繰り返されているが、注目すべきなのは 10B の返答である。日本語の書き言葉では、修飾する語は被修飾語の左に現れるが、ここでは 10B 全体として見ても、また最後の分裂文だけをみても、話しことばの出てくる順としては時間的に後に、文字化したものを見れば右に修飾語句が来ていると考えることができよう。もっとも、話しことばは音としてその場で出ては消えていくものなので、右に現れているのを見ることはできないが、ここでも、B が司法書士とは何かを説明するという比較的論理的な部分であるにもかかわらず、人間関係の親しさの現れのためか、思いついたことばから順に発していっているということが文字化資料によって明らかとなっている。

しかし、(77) の会話は二者による会話であるため、参加者が 2 人という点

で、両者が対等に、かつ等しく話し手になりやすいとも考えられる。その理由から、会話参加者が3人以上の会話について次に検討していく。

(78) 《A の家での学生3人の会話》

1A: 華原の真似して？ とか言って、アーイムプラーウドって、こんななってこんななって、// 華原の真似して。

2B: {アハハハ} 怖い。

3C: 似てんの、それが。// なーんか似てんだよね。

4A: そう、おもしろかった。うん、スマスマ、きのう、きのうじゃない、この前おもしろかった。

5C: ね、慎吾に何て言ったんだっけ？

6A: あ、// おまえも UFO じゃない、何か、何とか…。

7C: 五木ひろし、百回やれーって。

8B: あ、怒ったって感じ？

9A: なんか焼き肉と、犬のえさ交換して、お前こっち食べーって。

10B: えーっ。

11C: そうそう。それで食べてんの、箸で。

12A: P ちゃん、// おもしろかったー。

13C: めちゃくちゃかわいーよねー。

(78) は、A の家で、A と友人 B、C の3人による会話である。(78) の会話は会話の行われてる場面やテレビを見ているというコンテクストに大いに依存している。そのため、芸能歌手やテレビ番組という一種のコンテクストを共有していない部外者には理解し難いと感じられる。(77) の会話と異なり、(78) では、情報交換ではなく、それぞれが思い思いにことばを発している。話の中心は皆であり、皆でことばや、あるいは感嘆詞の声を発していることで会話が成り立っている。そのような会話の特徴として、3つのことが挙げられる。

- 1) まず、発話の重複が多いことである。1A が言い終わらないうちに 2B の発話はなされているし、3C-4A, 6A-7C, 12A-13C についても同じことがいえる。
- 2) 次に音声の面から、促音や撥音、長音が多く出ている。例えば、3B の「似てんの、それが。なーんか似てんだよね。」、また、7C の「やれーって」、9C の「食べーって」、10A の「えーっ」、11C の「それで食べてんの、箸で。」、13C の「めちゃうちゃかわいーよねー」等である。
- 3) また、1A, 3A, 4A, 11B に見られるように語句の繰り返しが多いことである。

分裂文の多く現れていた (78) や、これまで見てきた会話は、年代、環境の似た親しい友人同士の会話であった。分裂文の多かった会話 8 件の中には、そのような友人同士による会話だけでなく、会話の参加者が親子や姉妹、親戚の者といったものも、半分の 4 件あった。では、前者と後者の間の共通点は何であるか、また、分裂文の多く出る会話の特徴として、これまで見てきたようなことがいえるのかという点をみていくこととする。

(79) 《親類、4 人の会話》

- 1A: いぬをあんなところに飼うちゃいけんいーね。
2C: どこで飼うん。
3B: そりゃ、あんた、外で飼う。
4C: じゃけーね、犬は飼いたくない。あのダスキンが使えんけー。
5A: それーね。飼うちゃいけんいーね。
6B: あっちがわで飼いーね、あの車庫のところ。車庫のところで飼いーね。
7C: いいよね、あそこ。
8B: 今、^{ケイ}軽にしちよるけー、飼えりゃーせん？
9C: そりゃ飼えるんじゃけどね？

10B: あそこにしたらえー、下コンクリじゃし、しっこしたらだーっと
洗い流して。しっこすまーが？ あんまり。大人になったら間
じゃ。

11D: やっぱり我慢できんにゃーするいーね。

12B: そうかね。

13D: うん。

14B: うちのはいっそせんよ、ここ。ほんじゃけー連れて出るじゃ。

(79) の会話は、親戚同士のものである。この会話も地域というコンテクスト、また身内の者同士ということで、大いにコンテクストに依存しているといつてよかろう。この地域のことばを知らないなら、理解は容易ではない。そういった意味では、先の (77) と (78) の友人同士会話と同様、コンテクスト依存という特徴をここに見ることができる。また、5.1. の表の「話し手としての会話数」に関して、学生である D の数値 8 発話が、D の祖母 A や叔母 B、母 C の 3 人の平均 31 発話と比べて、ひとつだけ低かったことは、世代の違いにも関係があると思われる。(79) においては、1A から 10B までは A、B、C の 3 人の会話である。そこでは三者によって、会話がなされており、分裂文も 4C の「犬は飼いたくない。あのダスキンが使えんけー。」、7C の「いいよね、あそこ。」、10B の「しっこすまーが？ あんまり。」と現れている。また、5B の「あっちがわで飼いーね。あの車庫のところ、車庫のところで飼いーね。」と繰り返しも見られた。

以上のことから、分裂文の多く出現している会話の特徴として、次のようなことがいえる。

- 1) 会話参加者の「話し手としての発話数」が皆、同等であるような会話である。
- 2) 参加者の発話に重複が多い。
- 3) あいづち、擬態語、感嘆詞が多く、それらが繰り返されている。

- 4) 音声面から、長音、撥音、促音などが多い。
- 5) 思いついた事柄からことばとなっているため、日本語の書き言葉の特徴とは逆に、修飾語が被修飾語のあとに発話されている。
- 6) 参加者の間で共有されているものが多く、コンテキスト依存度が高い。

これらのことは全て、親しい人間関係を作っているコンテキストの中でこそ、可能である会話の特徴である。換言すれば、分裂文がたくさん産出される環境は、思いついたことからことばにして、「言いたいこと」を伝えていくことのできる親しい人間関係の中で、より生まれやすいといえよう。

6. おわりに

分裂文という名のもとに、いわゆる倒置文を捉えて分析した結果、日常会話における文というものが、たとえば句構造規則によって規定された要素をその規則どおり産出し、時にそれを省略したり移動したりするものと考えすることは、実情にそぐわないことが明らかになってきた。はじめに述べたように、真性分裂文が会話資料に極めて少ないことに注目し、その機能を担う形として倒置文と呼ばれるものをも分裂文の範疇にいれて考察をすすめてきたわけだが、そこで見えてきたことは、発話というものが、「言いたいこと」、思いついたことがらから「ことば化」され、文が完成されていっているということである。我々の集めた用例の中で、初めに来ている要素が、いかに「言いたいこと」であるかは、3.3 節で、それらが疑問、依頼、願望を表す文中に現れていること、あるいは「よ」や「じゃん」が付く表現であることから裏付けられている。

さらに、後続要素の機能を考えると、いずれも、「言いたいこと」を述べたあと、そうして始めた文を完成させていくものであることが明らかになった。完成の仕方は、意味内容を明らかにしていくものとしての主語や目的語、様々な副詞表現が後続する一方、接続詞、Modality を表す表現、体言止めな

ど、会話参加者の人間関係を良くすることを目的としているものがあることもわかった。

このような分裂文が多用される会話の特徴が、特に親しい対等な人間の交わりという側面を持つことが5節で明らかにされたが、これは、小熊(1996)に指摘された、日本語学習者にはこのような分裂文の使用が少なく、親しい感じを与えないということをあわせて考えると興味深い。これまでの外国語教育が、ともすれば、正しい文を教え込むことにエネルギーを注ぎ、ことばを生み出す基盤ともいえるべき親しい人間関係にあまり注目してこなかったことと重ねて、言語教育全般を見直す契機になればよいと考えるものである。

謝 辞

本研究はその基を、松宮美歩、小川由起子、定家陽子、中町かほる、諸氏の分析に負っている。ここに記して謝意を表するものである。

註

1995年度・1996年度の東京女子大学現代文化学部言語文化学科「英語研究Ⅲ」の受講生による、実際に交わされた日常会話を録音・文字化した資料である。学生本人とその家族・友人との会話を10分程度採録したもので、テレビ、ラジオ等の企画・編集による会話にはないありのままの日常のやりとりが記されている。

参 考 文 献

- 藤井洋子(1991)「日本語文における語順の逆転」『言語研究』99, 58-81
———(1995)「日本語の語順の逆転について」『日英語の右方移動構文』高見健一編
ひつじ書房
Fukui, Naoki (1993) "Parameters and Optionality," *Linguistic Inquiry* 24, 399-420.
井上和子(1978)『日本語の文法規則』大修館書店
久野 暁(1978)『談話の文法』大修館書店
丸山直子(1996)「話しことばにおける文」『日本語学』15, 50-59
宮地 裕(1984)「倒置考」『日本語学』3, 75-86
荻野綱男編(1996)『日本語学報告』1 東京都立大学
小熊貞子(1996)「日本語における発話文末の一考察—日本語母語話者と日本語学習者との比較—」修士学位論文 東京女子大学 現代文化研究科
眞田雅子・李延善・小熊貞子(1995)「日常会話に現れた日本語名詞句構造」東京女子大学紀要『論集』46, 121-139

- 高見健一 (1995a) 『機能的構文論による日英語比較』 くろしお出版
—— (1995b) 『日英語の右方移動構文』 ひつじ書房
—— (1997) 『機能的統語論』 くろしお出版
山梨正明 (1995) 『認知文法論』 ひつじ書房
吉本 啓 (1996) 「文の成り立ち」 『日本語学』 15, 13-21
Weinert, Regina and Jim Miller (1996) “Cleft constructions in spoken language,”
Journal of Pragmatics 25, 173-206.